

## 特集Ⅱ：性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築（その3）

日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・  
スペクトラムの人口学的多様性—「Aro/Ace 調査2020」の分析結果から<sup>1)</sup>—三宅大二郎<sup>i)</sup>・平森大規<sup>ii)</sup>

欧米諸国では、無作為抽出調査や当事者調査を用いた研究によりアセクシュアル人口の規模やその多様性が明らかになりつつある。一方、日本では無作為抽出調査を用いた研究が少数あるのみで、アセクシュアル人口の詳細な実態は検討されていない。そこで本論文では、Aro/Ace 調査実行委員会が実施したウェブ調査「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020」を分析した。回答者はシスジェンダー女性、若年層、南関東居住者が多い傾向であった。アロマンティックとアセクシュアルを自認する人が多かったが、他の Aro/Ace アイデンティティを自認している人も確認された。日本独自の区分である「ノンセクシュアル」の分析も行った。自慰行為と性欲についてはアセクシュアルでも一定数みられたのに対し、他者と性行為をしようと思う割合は特にアセクシュアルで少なかった。他者との性行為が自認に重要な意味を持つことが示唆された。

キーワード：アセクシュアル，アロマンティック，LGBT，性的マイノリティ，性的指向・恋愛的指向

## I. はじめに

近年、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）を含む性的マイノリティの可視化とともに、性的指向におけるマイノリティの1グループとして「他者に性的に惹かれないこと」（デッカー 2019: 20）を意味する「アセクシュアル／アセクシュアリティ（asexual/asexuality）<sup>2)</sup>」が日本においても雑誌記事やウェブニュースなどを通して少しずつ社会に認知され（例えば、大川 2018, 山本 2018）、学術的にも注目を集めはじめている（例えば、松浦 2020, 吉岡 2019）。諸外国では、人口学の領域

i) 中央大学ダイバーシティセンター嘱託職員

ii) ワシントン大学大学院社会学研究科 (Department of Sociology, University of Washington)

1) 本研究は、JSPS 科研費 JP16H03709 「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築」の助成を受け、科研プロジェクトの研究として行ったものである。「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020」データの二次利用にあたっては、Aro/Ace 調査実行委員会の許可を得た。英文要旨の作成にあたっては、カリフォルニア州立大学サンバーナーディノ校社会学部の Megan Carroll 氏による助言を受けた。ここに記して感謝申し上げたい。

2) セクシュアル (sexual) に否定を表す接頭辞「a」が付いた言葉である。英語圏では「a」を「エイ」と発音することが多い一方、日本では「ア」と発音されることが多く、「アセクシュアル」と表記することが多い。しかし、日本でも「エイセクシュアル」と発音されることがある。その他、「A セクシュアル」という表記もある。

でも『セクシュアリティ人口学に関する国際ハンドブック (International Handbook on the Demography of Sexuality)』(Baumle ed. 2013)において「アセクシュアリティの人口学 (The Demography of Asexuality)」(Bogaert 2013)という章が設けられるなど、アセクシュアル人口を対象とする研究が数少ないものの蓄積されつつある。また、社会学をはじめとする隣接領域では、アセクシュアルの回答者数が少なくなりがちな無作為抽出調査のみならず、アセクシュアルを主な対象とするアセクシュアル当事者団体によるオープン型ウェブ調査を利用した分析も行われている (Carroll 2020)。日本に目を向けると、大阪市 (釜野他 2019) や埼玉県 (埼玉県 2021) における代表性のある無作為抽出調査でアセクシュアルを選択肢の1つとして含んだ性的指向の設問がたずねられており、アセクシュアルを分析の射程に含んだ人口学研究も行われている (Hiramori and Kamano 2020a, 2020b)。

しかしながら、これらの研究はアセクシュアルに関する貴重な人口学研究である一方で、2つの欠点を抱えている。1つ目の欠点は、大半の研究がイギリスやアメリカをはじめとする欧米諸国を対象とした研究であることである (ただし、上記で挙げた日本における研究以外にも中国を対象とした研究 (Zheng and Su 2018) など、少数ながら例外もある)。後述するように、そもそも「アセクシュアル」の意味が日本語と英語で異なる場合があるなど、アセクシュアルをとりまく社会的・文化的背景は日本と英語圏で大きく異なる。したがって、欧米社会を対象とした研究における知見を日本社会にそのままあてはめることは必ずしもできない可能性が高い。2つ目の欠点は、Hiramori and Kamano (2020a, 2020b) で示されているような出生時に割り当てられた性別 (以下、出生時性別) や年齢階級別にみたアセクシュアルの分布をはじめとする基礎的な人口学的特徴以外については、日本におけるアセクシュアル人口の詳細な実態が把握できていないことである。日本で行われている数少ないアセクシュアリティの人口学研究では一般人口を対象とする無作為抽出調査が用いられているため、アセクシュアルに焦点を絞った分析を行うのが調査手法上、困難になっている。

そこで本論文では、日本において初めてアセクシュアルを主な対象としたオープン型ウェブ調査である「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020」(以下、「Aro/Ace 調査2020」) を用いて (Aro/Ace 調査実行委員会 2020)、日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの人口学的多様性を記述する。次章では、第1にアセクシュアルの概念的側面について検討し、アセクシュアルや関連する概念の整理をするとともに、アセクシュアルをとりまく日本特有の文脈についても解説する。第2に、人口学領域を中心にこれまで行われてきたアセクシュアルに関する研究動向を概観し、日本におけるアセクシュアル研究の課題を指摘する。

## II. 背景

### 1. アセクシュアルに関連する概念

#### (1) アセクシュアルの定義

アセクシュアル研究において、アセクシュアルは性的惹かれ (sexual attraction) の欠如として捉えるのが一般的である (Chasin 2011). 性的惹かれとは、他者によって性的欲望 (sexual desire) や性的興奮 (sexual arousal) をかき立てられ、その人に強い関心を抱くことである (Mardell 2016). なお、性的惹かれは性的欲望や性行動、身体的な興奮、恋愛感情 (romantic inclination) から独立した別の要素であり (Bogaert 2015), 性的欲望や性行動などその他の要素を必ずしも伴うものではないという点に留意する必要がある。

一方で、アセクシュアルは性的欲望の障害など性機能不全として捉えられ病理化された上で、医学的研究の対象にもされてきた (Scherrer 2008). 例えば、アメリカ精神医学会が発行する「精神疾患の診断・統計マニュアル第4版 (DSM-IV)」は、苦痛 (distress) や対人関係の困難を伴う性的欲望の欠如を「性的欲望低下障害 (Hypoactive Sexual Desire Disorder, HSDD)」と定義している (American Psychiatric Association 2000). ブレイン (2006: 35) によると、「精神分析ではセクシュアリティを主観性を形成する中心的な力であると見なすが、この立場からするとアセクシュアリティは抑圧や生化学や器官の「異常」にその原因があると説明される<sup>3)</sup>」. アセクシュアルは「性的に惹かれないこと」であり、性的欲望の欠如によって診断される HSDD とは区別されるという見方がある一方で (Bogaert 2006), 性的惹かれと性的欲望によってアセクシュアルと HSDD を区別することは混乱を呼ぶとも指摘されている (Chasin 2014). 実際に、アセクシュアルを自認する人は他のセクシュアリティの人と比べて性的欲望が低いと報告されており (Prause and Graham 2007), アセクシュアルを自認する人が HSDD と診断される可能性は否定できない. Hinderliter (2013) はアセクシュアルと HSDD の区別について、定義以上に各概念の歴史とその目的に注目すべきであると述べ、アセクシュアルは当事者が共通の経験をもとにコミュニティをつくるための概念である一方、HSDD は医療者が問題を描き出し、治療するために構築された概念であると指摘している. これはアセクシュアルを自認する人が HSDD と診断された場合、治療という形で自身のあり方に介入される可能性を示唆している. DSM-IV の改訂版である DSM-5 では、アセクシュアルを自認する人には性的欲望の障害<sup>4)</sup> の診断を下さないという基準が追加されたため (American Psychiatric Association 2013), アセクシュアルを性的欲望の障害と捉える

3) フロイトによる精神分析理論をアセクシュアル研究の観点から批判的に考察した論考として松浦 (2020) がある。

4) HSDD は DSM-5 で「男性の性的欲望低下障害 (Male Hypoactive Sexual Desire Disorder)」と「女性の性的関心・興奮障害 (Female Sexual Interest/Arousal Disorder)」に変更された. これは性的欲望と興奮の困難さが、女性の場合はしばしば同時に起こり、男性では別々に起こることを考慮した結果だと説明されている (American Psychiatric Association 2013).

見方は一般的ではなくなるかもしれない。しかし、性機能不全とセクシュアリティにおける「通常のバリエーション (normal variation)」の区別にはあいまいさが依然として残り (Hinderliter 2015)、アセクシュアルの病理化は今後も注視すべき論点である。そしてこれは現代の欧米社会において人々は性的であるべきである、または性的なことが健康であるという前提と関連しており (Gazzola and Morrison 2011)、欧米社会以外の文脈において性的であることが健康や病理といかに関連付けられているかを検討する必要性を示唆している。

その一方で、このように性的惹かれや性的欲望の欠如が否定的に捉えられるようになったのは比較的最近のことであり、それまでは多くの宗教でむしろ肯定的に捉えられてきたといわれている (Bogaert 2006)。現代においても、例えばキリスト教のコミュニティでは性的でないことが推奨され、アセクシュアルであることは問題とならない<sup>5)</sup>ことが多い (Tori 2018)。このようなアセクシュアルと宗教的価値観との親和性が、以下のような混同を生むことがある。エヴァンズ (2006) によれば、セリバシー (celibacy) は「性的関係を持たないこと」、貞節の純潔さを表し、さまざまな理由で禁欲することであるが、そのセリバシーが (誤って) アセクシュアリティを意味する言葉として用いられるという。つまり、アセクシュアルであることが、宗教的な理由などで禁欲していることだと誤解されることがある。しかしながら、アセクシュアルの文脈ではセリバシーは明確に区別されており、アセクシュアルは本人の意思によって「性的関係を持たないこと」や禁欲することではないとされている (Hinderliter 2013)。以上の議論から、アセクシュアルを性的欲望や性行動の欠如ではなく、性的惹かれの欠如として捉えることがより適切であると推察される。

アセクシュアルを定義する上で、性的惹かれに加えてもう1つの重要な論点としてアセクシュアルの自認 (アイデンティティ) が挙げられる。2000年前後から性的指向の1つとして概念化されたアセクシュアルはアイデンティティとして、そして1つのムーブメントとして表出したため (Hinderliter 2013)、近年の研究はアセクシュアルを性的指向の1つ、ないしはその欠如として捉えてきた (Chasin 2011)。アセクシュアルが性的指向のカテゴリーとして理解されることは、レズビアンやゲイなど他のカテゴリーと同様に、ある人々がアセクシュアルという自認を持っていると研究者が推定するようになることを意味する (Chasin 2011)。アセクシュアル自認をどのように把握するかについては調査によりさまざまな手法があるが (Brotto et al. 2010, Greaves et al. 2017, Prause and Graham 2007)、アセクシュアルを定義する手法の1つとして、性的惹かれの他にアセクシュアルの自認が用いられていることがわかる。

しかしながら、性的惹かれや自認のみをもとにアセクシュアルであるか否かを測定することの妥当性に関しては、しばしば議論の対象となってきた。例えば、アセクシュアルと自認している人のみを対象にすることで、自認していないアセクシュアルな人の存在を隠

---

5) キリスト教のコミュニティにおいても、結婚をすることや子を産み育てることが期待される点で必ずしもアセクシュアルが肯定されているとは言えない点に留意する必要がある (Tori 2018)。

し、アセクシュアルに関する理解を偏らせるという指摘 (Brotto and Yule 2011) や、性的惹かれや自認など性的指向に関するさまざまな質問を問うと回答が一致しないなど性的指向のあり方は多面的であるという指摘 (Brotto et al. 2010, Prause and Graham 2007) がある。このような指摘に呼応して、Chasin (2011) は、ある個人がアセクシュアルであるか否かを性的惹かれや自認に関する設問を用いて一義的に測定できるという発想は、アセクシュアルが性的指向に基づく同質性の高い集団であるという捉え方を前提にしていると主張する。Chasin (2011) によると、アセクシュアルは惹かれや欲望の有無、程度、質などの要素で構成されている複雑な現象であり、単に「性的に惹かれることがない」というわけではない。アセクシュアルの意味は自認している各人により異なり、性的惹かれだけではなく性的欲望や性行動によって自認することもあるという Scherrer (2008) の調査結果は、この主張を裏付けるものである。したがって、アセクシュアルという自認には多義性があり、アセクシュアルを自認することが、そのままある特定の性質を表すわけではないということが示唆される。

それでは、性的惹かれ、性的欲望や性行動に関して多様な人々がアセクシュアルという共通の自認を持つのはなぜなのだろうか。Chasin (2014) によると、アセクシュアルとはある特定の性質を表すカテゴリーではなく、社会における強制的性愛 (compulsory sexuality) の可視化に有用な政治的な性的指向カテゴリー (political sexual orientation category) である。強制的性愛とは、性行為やセクシュアリティを特別なものであると位置づけ、身体健康や自己形成、親密な関係と紐づける考え方や規範である (Przybylo 2016)。すなわち、アセクシュアルという自認を持つことで、この規範を可視化させ、相対化させるのに寄与することが可能になると考えられる。セクシュアリティは生得的、本質的なものであると捉えることでアイデンティティを正当化しやすくなると言われているが (Scherrer 2008)、この傾向がアセクシュアルを自認する人々にもあると指摘されている (Pacho 2013)。加えて、アセクシュアルとしてのアイデンティティ形成がアセクシュアル当事者のコミュニティ形成にも貢献している点など、他の周縁化された性的指向に関わるアイデンティティを持つ集団と類似の社会心理的プロセスがアセクシュアルにもみられる (Scherrer 2008)。さらに、アイデンティティ形成の機能の一例として、アセクシュアルを性的指向の1つとして位置づけることで、他の非異性愛の性的指向と同じように人々にアセクシュアルを理解し、尊重し、病理として扱わず、性的指向を変えようとしないうよう促す働きが挙げられる (Hinderliter 2013)。これらの議論はアセクシュアル概念の意味内容だけでなく、アセクシュアルというアイデンティティが持つ機能について検討する必要性を認識させる。

自認と同様に性的惹かれについても、それをもとにアセクシュアルであるか否かを判断することの妥当性を問う議論がある一方で、性的惹かれという概念の有用性も指摘されている。アセクシュアルの中心的要素と捉えられてきた性的惹かれ概念は、自慰行為など性的とされることも多い行動をする個人を包括し (当事者コミュニティにおいて自慰行為は「他者に向かない性欲 (undirected sex drives)」として概念化され、アセクシュアルと矛

盾しないとされる), 性行動を基準とする考え方(セリバシーとの混同, 性行為をするアセクシュアルを排除すべきとする立場)と距離を取ることが可能になる点で有用性がある(Hinderliter 2013). 性的に惹かれたことがない人は, 経験したことの無い性的惹かれについてたずねられても理解できないはずであり, その点で定義として矛盾があるという指摘(Hinderliter 2009)も, 上述の有用性ならびに, アセクシュアルというアイデンティティの多義性と機能を鑑みれば, 定義として不適切であるとまでは言えないのかもしれない. これらから, アセクシュアルにはさまざまな定義の仕方があり, 人口学研究においてアセクシュアルか否かをどのような指標を用いて測定するかについては, 研究目的との整合性を踏まえた上で慎重に検討する必要があることがわかった.

## (2) アセクシュアルに関連する概念と当事者の多様性

本項では, アイデンティティを共有する当事者コミュニティで用いられる概念を整理する. 特に, アセクシュアルのコミュニティで性的次元と恋愛的次元が区別される傾向について記述し, 当事者の多様性について述べる.

当事者コミュニティとして最も有名なものは, 2001年に設立された Asexual Visibility and Education Network (AVEN)<sup>6)</sup>である. 当事者を対象にした数多くの調査(例えば, Bogaert 2012, Brotto et al. 2010, Brotto and Yule 2011, Prause and Graham 2007, Scherrer 2008, Yule et al. 2014)が AVEN のサイトを通して協力者を集めている. AVEN はアセクシュアルのコミュニティがそのニーズや経験において非常に多様性があると述べており<sup>7)</sup>, その多様性についてはコミュニティ内で用いられるアセクシュアル以外のアイデンティティ・カテゴリーの多さからもうかがうことができる. 例えば, 「グレイアセクシュアル/グレイセクシュアル (gray-asexual/gray-sexual)」および「デミセクシュアル (demisexual)」はその代表例である. 前者は「アセクシュアルとセクシュアルの間のある位置で自認している人」<sup>8)</sup>, 後者は「情緒的な繋がりができてからのみ性的惹かれを感じる人」<sup>9)</sup>という意味で用いられる. なお, 前者のようなカテゴリーが成立するのは, アセクシュアル・コミュニティにおいてアセクシュアルとセクシュアルが連続していると考える「性的指向の連続スペクトラムモデル (the continuous spectrum models of sexual orientation)」が採用されているためである (Chasin 2011). その他, 「性的な感情を返されることや他者との行為を必要としない形で性的に惹かれる」という意味の「リスセクシュアル (lithsexual)」<sup>10)</sup>など, アセクシュアルのコミュニティには実に様々なアイデンティティのラベルが存在する.

さらに, コミュニティ内で頻繁に語られる重要な概念として「アロマンティック

6) <https://www.asexuality.org/> (2021年2月25日最終アクセス)

AVEN はアセクシュアルを「性的惹かれを経験しない人 (a person who does not experience sexual attraction)」と定義する.

7) <https://www.asexuality.org/?q=overview.html> (2021年2月25日最終アクセス)

8) <http://wiki.asexuality.org/Gray-A/Grey-A> (2021年2月25日最終アクセス)

9) <http://wiki.asexuality.org/Demisexual> (2021年2月25日最終アクセス)

10) <https://rainbowpedia.wikia.org/wiki/Lithsexuality> (2021年2月25日最終アクセス)

(aromantic)」が挙げられる。アロマンティックは「恋愛的に惹かれない、またはほとんど惹かれない」<sup>11)</sup> という意味で、「恋愛指向 (romantic orientation)」の1つとされ、性的指向の1つとされるアセクシュアルとは別次元の概念として紹介される。恋愛指向とは恋愛的に惹かれることの有無や対象の性別に関する概念であり (Antonsen et al. 2020), アセクシュアルの性的指向に関する議論の中で性的指向と恋愛指向が区別されるようになったと言われている (Chu 2014)。アセクシュアルを自認する人の中には、「ヘテロロマンティック (heteroromantic)」、 「ホモロマンティック (homoromantic)」、 「バイロマンティック (biromantic)」などアロマンティック以外のカテゴリーを自認する例も報告されており (Brotto et al. 2010), アセクシュアルの恋愛指向の多様性が示唆される。なお、恋愛的に惹かれる性別の差異は問わず、恋愛的に惹かれるアセクシュアルをまとめて表現する際は「ロマンティック・アセクシュアル (romantic asexual)」と呼ぶ。上記カテゴリーが、それぞれヘテロセクシュアル、ホモセクシュアル、バイセクシュアルと対応しているように、「グレイアロマンティック/グレイロマンティック (gray-aromantic/gray-romantic)」や「デミロマンティック (demiromantic)」、 「リスロマンティック (lithromantic)」<sup>12)</sup> というカテゴリーも存在する。惹かれる対象の性別や、その有無、惹かれの仕方を表す接頭辞 (hetero-, homo-, bi-, a-, gray-, demi-) と惹かれの種類を表す接尾辞 (-sexual, -romantic) の組み合わせでこれらカテゴリーが構成されていることがわかる。上述のような性的惹かれと恋愛の惹かれを分ける考え方は、主にコミュニティ内で「スプリット・アトラクション・モデル (the split attraction model)」<sup>13)</sup> とも呼ばれ、この区別がコミュニティにとって重要な意味を持つことが推察される。

以上、アセクシュアル・コミュニティの多様性についてカテゴリーの細分化という側面から検討したが、コミュニティが共同体として維持されるために必要と思われる包括概念についても簡単に説明する。本論文では「Ace (日本でもそのままの表記が多い)」、 「Aro (日本でもそのままの表記が多い)」、 「スペクトラム (spectrum)」を紹介する。Ace はアセクシュアルならびにそれに近いカテゴリーのアイデンティティ全体を指す略語で<sup>14)</sup>、スペクトラムは範囲、領域を意味する。スペクトラムそのものは英語で一般的に使われる単語だが、アセクシュアル・コミュニティでは、あるアイデンティティの周辺/関連という意味を持つ用語として使われる<sup>15)</sup>。両者を組み合わせて、「アセクシュアル・スペクトラム、Ace スペクトラム」と呼ぶことがある。一方、アロマンティックなど恋愛の指向に関連するアイデンティティを包括した略語としては「Aro」があり、「アロマンティック・スペクトラム、Aro スペクトラム」という言葉も使われている。近年では Ace コミュ

11) <http://wiki.asexuality.org/Aromantic> (2021年2月25日最終アクセス)

ロマンティック (romantic) に否定を表す接頭辞「a」をつけた表現である。アセクシュアルと同様に、英語圏では「エイ」と発音されることが多いものの、日本では「ア」と発音されることが多い。

12) <https://mogai.fandom.com/wiki/Lithromantic> (2021年2月25日最終アクセス)

13) <https://aroacefaq.tumblr.com/post/143810110365/the-split-attraction-model-what-is-it> (2021年2月25日最終アクセス)

14) <https://www.asexuality.org/?q=general.html#def> (2021年2月25日最終アクセス)

15) <https://www.asexuality.org/?q=general.html#def> (2021年2月25日最終アクセス)

ニティとは別に、Aro コミュニティも発展しつつある<sup>16)</sup>。Ace と Aro 両方のスペクトラムについて言及する際には、「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム、Aro/Ace スペクトラム」と呼ぶこともある<sup>17)</sup>。

### (3) 日本の文脈

最後に日本の当事者コミュニティについて概観する。日本では英語圏におけるコミュニティの発展に伴い、2002年頃からアセクシュアルという言葉が主に性的マイノリティの間で少しずつ認知されるようになったと言われている<sup>18)</sup>。アセクシュアルに関する情報、特にアイデンティティ・カテゴリーなどは英語圏の概念をカタカナにして流用していることが多いが、その概念の意味内容は英語圏と異なる部分がある。例えば、日本ではアセクシュアルを「恋愛感情がなく、性的な欲求がない（アロマンティックのアセクシュアルに近い）」という意味で使い、「恋愛感情があり、性的な欲求がない（ロマンティックのアセクシュアルに近い）」ことを「ノンセクシュアル」と呼ぶことがある<sup>19)</sup>。これは日本独自の区分であり、英語圏以外の諸外国でもみられない傾向である。

日本でこうした区分ができる背景としては、「恋愛感情の有無」を中心に捉える点が影響していると言われており<sup>20)</sup>、これは日本社会の恋愛感情を重視する傾向が反映されていると考えられる。日本の量的調査において性的指向と性自認のあり方をどのようにたずねるかについて方法論的研究を行った Hiramori and Kamano (2020b) も、日本においては、個人の性的指向を測定する際に欧米諸国のような性行動、性的惹かれ、性的指向アイデンティティなどではなく、恋愛的惹かれを用いることが多いと指摘している。なお近年では、日本においても英語圏に近い用法が見られ、当事者によってアセクシュアルの意味が異なるのが日本のアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム・コミュニティの現状である。本論文では、諸外国の研究との比較も鑑み、英語圏に近い用法でアセクシュアルを使用する。

## 2. アセクシュアルに関する人口学研究の動向

### (1) 諸外国における無作為抽出調査

近年、諸外国では無作為抽出調査において性的指向をたずねることが増えてきているが、アセクシュアル人口を把握できるようなたずね方をしている調査は数が限られている。カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California, Los Angeles) に設置されているウィリアムズ研究所 (Williams Institute) が招聘したセクシュアル・マイノリティ・

16) <https://www.aromanticism.org/> (2021年2月25日最終アクセス)

17) <https://identitiesandorientations.weebly.com/aroace-spectrum.html> (2021年2月25日最終アクセス)

Ace と Aro を包括する概念として、A-spec という言葉もある。

18) [https://www.asexual.jp/history\\_japan.php](https://www.asexual.jp/history_japan.php) (2021年2月25日最終アクセス)

19) <https://www.asexual.jp/info.php#japan> (2021年2月25日最終アクセス)

2003年頃には、狭義のアセクシュアル (現在のアロマンティック・アセクシュアル) と広義のアセクシュアル (恋愛的指向を問わずアセクシュアル) という分け方も確認されている。

20) <https://www.asexual.jp/info.php#japan> (2021年2月25日最終アクセス)

アセスメント研究チーム (Sexual Minority Assessment Research Team, SMART) (2009) による量的調査における性的指向の測定に関するベストプラクティスは、さまざまな調査で設問ガイドラインとして広く利用されているが、性的指向アイデンティティをたずねるモデル設問の選択肢にアセクシュアルは含まれていない。また、性的惹かれについても「(a) 女性のみ惹かれる、(b) ほとんど女性に惹かれる、(c) 男性と女性に同じくらい惹かれる、(d) ほとんど男性に惹かれる、(e) 男性のみ惹かれる、(f) わからない」(SMART 2009: ii) という選択肢を利用することが推奨されており、他者に対する性的惹かれを経験しない人が回答できる選択肢は存在しない。

しかしながら、不完全な指標を用いながらもアセクシュアルの人口規模や人口学的特徴を把握すべく、これまでいくつかの調査研究が行われてきた。とりわけ重要なのが、Bogaert (2004) によるイギリスの無作為抽出調査を利用した研究と Poston and Baumle (2010) によるアメリカの無作為抽出調査を利用した研究である。Bogaert (2004) は性的惹かれがないことをアセクシュアルの指標とした上でイギリスに住む16歳から59歳を対象に行われた「性に対する態度とライフスタイルに関する全国調査 (National Survey of Sexual Attitudes and Lifestyles, NATSAL-I)」を分析し、回答者のうち1.1%がこれまで誰に対しても性的惹かれを感じたことがないアセクシュアルであると示した。また人口学的特徴を検討した結果、アセクシュアルと分類された人はそうでない人に比べて学歴や職業階層、非単身割合が低く、非白人および女性に多いことも明らかにした。非アセクシュアル回答者のうち43%が男性であるのに対し、アセクシュアル回答者では29%が男性であった。Bogaert (2004) は女性の方が多い背景要因として、男性の方が女性よりも性的に活発であることを性役割として求められていること、男性と比べて女性の方が性器の反応から性的に興奮していてもそのことに気づかずに他者のことを性的な対象として捉えていないこと、女性の方が自慰などのような性的指向を形成するにあたって重要な経験をもっていないこと、他者に対する性的惹かれをもとに性的指向を測定しても女性の主観的経験をうまくとらえることができていないことなどの可能性を指摘している。その一方で年齢については、アセクシュアルは性的な経験の少ない若年層に多いだろうという予想に反し、むしろアセクシュアル回答者 (平均年齢: 38歳) は非アセクシュアル回答者 (平均年齢: 36歳) に比べて平均年齢が2歳高いことがわかった。

Poston and Baumle (2010) は、Bogaert (2004) がイギリスの調査をもとに行ったものと類似した分析をアメリカに住む15歳から44歳を対象に2002年に実施された「家族の拡大に関する全国調査 (National Survey of Family Growth, NSFG)」を利用して行い、さらに Bogaert (2004) で用いられた性的惹かれ以外にも性行動およびアイデンティティの指標を用いてアセクシュアル人口の規模を推定した。分析の結果、女性のうち0.8%、男性のうち0.7%が性的惹かれについて「わからない (not sure)」と回答しており、女性のうち4.8%、男性のうち6.1%がこれまでにセックスをしたことがないことがわかった。アイデンティティについては、女性のうち3.8%、男性のうち3.9%が「その他の何か (something else)」を選択しており、女性のうち9.2%、男性のうち11.9%が、性的惹か

れ、性行動、アイデンティティの少なくともいずれか1つについてアセクシュアルと分類されうる回答をしていた。また、これらの9.2%の女性や11.9%の男性が必ずしも性的指向に関する3つの側面すべてについてアセクシュアルと分類されるような回答を一律に行っているわけではないことも明らかにした。このように、Poston and Baumle (2010) はアセクシュアルをどのように定義するかによって人口規模の推定値が大きく変わることを示した一方で、Poston and Baumle (2010) 自身が指摘しているように、NSFGを利用した分析の限界点として、性的惹かれに関して「わからない」という回答は、性的惹かれないアセクシュアル以外にも回答する可能性があることが挙げられる。同様に、アイデンティティに関して「その他の何か」という回答は、これ以外に選択肢として用意されている異性愛、同性愛、両性愛以外のどのアイデンティティを持つ回答者も選択する可能性がある。したがって、これらの指標はアセクシュアル人口の規模を推定するにあたって完璧な指標ではなく、実際のアセクシュアル人口よりも規模を大きく推定してしまう。そのため、より正確にアセクシュアル人口をとらえ、その生活実態を理解するためには、Hiramori and Kamano (2020b) が推奨するモデル設問のように、性的惹かれないという選択肢を性的惹かれの設問に含めたり、アセクシュアルという選択肢を性的指向アイデンティティの設問に含めたりした上で、性的惹かれやアイデンティティなど、性的指向のどの側面に研究関心があるかを明確にすることが重要である。

## (2) 当事者団体による有意抽出調査

本項では、当事者団体による量的調査を紹介する。当事者団体による調査は当事者コミュニティのネットワークを用いて関心層にアプローチするため、無作為抽出調査では把握困難なマイノリティ層による回答を多く得られる傾向にある。さらに、調査が当事者コミュニティの状況に則して設計されているため、性的指向と恋愛の指向を区別したアイデンティティなど、当事者の多様性を把握しやすいという利点がある。

当事者団体による調査として大規模なものは「アセクシュアル・コミュニティ・サーベイ (Asexual Community Survey, ACS)」が挙げられる。ACSは2014年からアセクシュアル・コミュニティの有志が毎年実施しているオープン型ウェブ調査である。ここでは2018年に実施された調査結果を取り上げる (Weis et al. 2020)。調査対象を13歳以上に設定し、英語で実施されたこの調査は回答数が15,177であった。この調査では、「自分をアセクシュアル・スペクトラムだと認識していますか？」という設問に「はい」(91.1%) または「わからない」(4.2%) と回答した人を Ace とし、それ以外を非 Ace とした (Weis et al. 2020)。

Ace アイデンティティの内訳は、アセクシュアル (65.9%)、デミセクシュアル (10.1%)、グレイアセクシュアル (11.8%)、クエスチョニング (10.6%)、その他 (1.6%) であった。回答者の性自認は女性が61.7%、男性が13.4%、該当なしが24.8%で、女性が全体の約2/3を占め、該当なし (男女以外の性自認) が1/4程度となった (Weis et al. 2020)。年齢は、中央値が22、平均値が23であった。居住地は計73ヵ国にわたり、回答数が多かつ

た上位3地域はアメリカ57.3%、イギリス8.8%、カナダ6.7%であった。恋愛指向アイデンティティは複数回答で、上位5つがアロマンティック32.1%、パンロマンティック（性別に関係なく恋愛的に惹かれる）23.5%、バイロマンティック22.7%、クエスチョニングまたはわからない（unsure）17.7%、ヘテロロマンティック17.4%という結果だった。性的刺激を求める性欲（sex drives）／性衝動（libido）の強さを0から4で表すと、アセクシュアルは0が22.8%、1が38.5%、2が26.6%、3が9.9%、4が2.3%だった。非Ace以外のカテゴリーは1が最も多かった点で共通していた一方、アセクシュアルは他のカテゴリーと比べて0の割合が高く、2以上の割合が低い傾向にあった。自慰行為の頻度については非Aceが一番高く、アセクシュアルが一番低い結果だった。その他のカテゴリーは前述の2カテゴリーの間に収まる結果を示した（Weis et al. 2020）。

### (3) 日本における研究動向

次に、日本においてアセクシュアルを取り上げている量的調査について検討する。諸外国と比べ、日本では性的指向をたずねる量的調査の数が少ないが、その中でも特にアセクシュアルまたはそれに類する選択肢を設けている調査はほとんどない。現在日本に存在する量的調査のうち、アセクシュアルの人口学的特徴を把握するデータとして最も重要なのは2019年に行われた「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」（大阪市民調査）である（釜野他 2019）。この無作為抽出調査では、性的指向の要素として性的指向アイデンティティ、恋愛惹かれ、性的惹かれ、性行動の4問がたずねられている。恋愛感情を抱く相手、性的に惹かれる相手、セックスの相手については、これまでと最近の5年間について聞いている。調査の結果、性的指向アイデンティティとして「アセクシュアル・無性愛者」を選んだ回答者は0.8%であることがわかった（Hiramori and Kamano 2020b）。他のセクシュアル・マイノリティのカテゴリーと比べると、両性愛者（1.4%）よりは割合が低いものの同性愛者（0.7%）とほぼ同じ割合である。また、出生時の性別にみると、出生時性別が男性の場合は回答者の0.3%がアセクシュアルであるのに対し、出生時性別が女性の場合は回答者の1.1%がアセクシュアルであり、諸外国の調査でみられるアセクシュアルは男性に比べて女性の方が多いという結果が日本においても確認された。年齢階級別にみると、30代および40代については回答者の0.6%、50代については回答者の0.7%がアセクシュアルなのに対し、18-29歳層では回答者の1.6%がアセクシュアルであり、アセクシュアルは若年層に多いというACS等の知見を確認する結果となった（Hiramori and Kamano 2020b）。性的指向アイデンティティ以外の性的指向の指標をみると、出生時性別が女性のうち2.9%がこれまで男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがなく、4.0%がこれまで男女どちらにも性的に惹かれたことがない一方で、出生時性別が男性のうち2.0%がこれまで男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがなく、1.5%がこれまで男女どちらにも性的に惹かれたことがないことが明らかになった（釜野他 2019）。

また、同じ大阪市民調査を用いて性的指向アイデンティティ、恋愛惹かれ、性的惹か

れ、性行動の相互関連性を検討した研究もある (Hiramori and Kamano 2020a). 出生時に割り当てられた性別と同じ性別を生きる人であるシスジェンダーの男女を対象を限定した上で分析を行ったところ、アセクシュアル自認を持つ女性のうち約半数はこれまで「男女どちらにも性的に惹かれたことがない」一方で、男性のみ (異性のみ) に性的に惹かれる回答者が4割近くいることや、恋愛惹かれについてもアセクシュアル自認を持つ女性のうち、これまで「男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがない」回答者が約4割と、男性のみ (異性のみ) に恋愛感情を抱く回答者の5割よりも割合が少ないことがわかった。加えて、トランスジェンダーを含めた全回答者のうち1.6% (出生時女性: 2.1%, 出生時男性: 0.9%) が恋愛惹かれも性的惹かれもこれまで感じたことがない (アロマンティック・アセクシュアルに近いと考えられる) 一方で、1.3% (出生時女性: 1.8%, 出生時男性: 0.6%) が恋愛惹かれは感じるが性的惹かれのみこれまで感じたことがない (ロマンティック・アセクシュアルに近いと考えられる) ことが明らかになった。さらに、性的惹かれがない人の性行動を検討したところ、性的惹かれをこれまで感じたことがない人のうち60.6%はこれまで「セックスをしたことがない」一方で、38.6%がセックス経験ありと回答していることがわかった (Hiramori and Kamano 2020a). 大阪市民調査の他にも、埼玉県が無作為抽出調査を実施しており、回答者の0.7%がアセクシュアルと自認している (埼玉県 2021).

その他、日本で行われたアセクシュアルに関連する量的調査としては、モニタ型ウェブ調査の「2015年家族形成とキャリア形成についての全国調査」(Kobayashi 2017) がある。Kobayashi (2017: 14) はアセクシュアルを「キス、デート、性行為、恋愛関係を持つことなどの性行動に関して経験ないし関心が少ない/低いこと」と定義し、ここで定義したアセクシュアルな人が増加することを「アセクシュアル化 (asexualized)」と呼んだ。分析の結果、20代、30代女性はアセクシュアル化が観測されず、20代、30代男性はアセクシュアル化が進んでいると報告した (Kobayashi 2017). この研究は性別や年齢階級別にみた性行動などの傾向を把握するのに有用である一方、以下の2点からアセクシュアル研究としては問題があると言わざるを得ない。1点目は、この研究がアセクシュアル研究において行動を定義とすることは一般的でないこと (Chasin 2011) や、性的な次元と恋愛次元を分けてセクシュアリティを捉えること (Antonsen et al. 2020, Chu 2014) など、これまで行われてきたアセクシュアル研究の蓄積を反映していないことである。2点目は、本研究が少子化の文脈から議論されていることである。アセクシュアルというアイデンティティを持ち生活している人が現実に日本にもいる中で、少子化を「アセクシュアル」という言葉と結びつける形で表現すれば、アセクシュアルであることが少子化を生み出すと捉えかねられない。そして、政策上の課題とされる少子化の文脈の中でアセクシュアルを議論することで、アセクシュアルそのものが問題であるかのような印象をつくり出す可能性もある。以上の点から、Kobayashi (2017) による研究はアセクシュアルではなく「性行動の減少傾向」という枠組みで行った方が誤解を招きにくいと考えられる。

上記で概観してきたように、日本においても近年、アセクシュアルの実態を把握可能な

量的調査が数少ないながらも実施されるようになってきた。しかしながら、このような調査を用いてアセクシュアルに関する実態を詳細に描写することは困難である。調査結果が関心のある人口集団（例えば、日本に在住する人）に一般化可能かどうかという点においては大阪市民調査などのような無作為抽出調査の方が当事者団体等による有意抽出調査よりも優れており、モニタ型ウェブ調査にも特有の利点があるものの、マイノリティ当事者が抱える困難などを詳述することが目的である場合、コミュニティ調査にも大きな意義がある (Krueger et al. 2020)。とりわけ、マイノリティ集団の中に存在する多様性を描く際には、データ内に含まれるマイノリティ当事者の人数が多くなるような設計の調査が必要である。しかしながら、これまで日本で行われてきた性的マイノリティ団体による既存のコミュニティ調査においてもアセクシュアル回答者は少なく、独立した性的指向として扱われないことが多い（例えば、認定 NPO 法人虹色ダイバーシティ・国際基督教大学ジェンダー研究センター（2020）による調査など）。したがって、日本においても性的マイノリティ全体を対象にした調査ではなく ACS のようなアセクシュアルに特化した調査が求められている状況がある。そこで本論文では、このようなアセクシュアルに焦点を当てた調査研究を行うべく立ち上げられた Aro/Ace 調査実行委員会が実施した「Aro/Ace 調査 2020」を分析し、日本におけるアセクシュアルの人口学的多様性を示す。

### Ⅲ. データと方法

#### 1. データ

本論文では、Aro/Ace 調査実行委員会によって実施された調査である「Aro/Ace 調査 2020」を使用する。調査目的は「(1) Aro/Ace の可視化を促す、(2) Aro/Ace コミュニティに集まる人たちの多様性について議論するための情報を収集する、(3) Aro/Ace に関する情報を提供し、学術研究の発展や Aro/Ace に関する運動の活性化に寄与する」(Aro/Ace 調査実行委員会 2020) ことであり、「(1) アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムを自認している、またはそれに近い、そうかもしれないと思っている方、(2) 日本語の読み書きをする方 (国籍, 居住地は問わない)、(3) 年齢が回答時13歳以上の方」(Aro/Ace 調査実行委員会 2020) を調査対象者としている。設問の設計にあたっては、日本の文脈において「アセクシュアル」という用語が、恋愛惹かれと性的惹かれないいずれもない人を指すことがあるため、恋愛感情に関連する設問を先に配置し、適宜調査内で使用する語の用法を明記するようにするなど、回答者ができるだけ正確に回答できるよう工夫を行った。調査手法としては、本調査はオープン型ウェブ調査であり、Aro/Ace 調査実行委員会のウェブサイト、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの Twitter や当事者 LINE グループなどで調査の周知を行った。ウェブ上のアンケートフォームで回答者が調査への協力に同意した後、自主的に回答する形式をとっている。調査対象者に該当するかに関する項目や設問の分岐に必要な項目以外はすべて任意回答となっている。調査は2020年6月1日から6月30日まで行われ、合計1,693の回答が集まった。その

うち、「自分のことをアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム（Aro/Ace）に当てはまると思いますか。本調査では、アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムを、アロマンティック、アセクシュアル、ノンセクシュアル、デミセクシュアル、デミロマンティック、リスセクシュアル、リスロマンティックなどその他周辺のセクシュアリティという意味で用います。」という設問に対して「いいえ」と回答した8人を除外した1,685を有効回収数とした。なお、日本語の読み書きおよび年齢の条件をもとに除外した回答はなかった。調査の詳細についてはAro/Ace調査実行委員会（2020）に記載されている。

## 2. 方法

本論文では、まず回答者の性別、年齢階級、居住地の分布を検討する。次に、先行研究を踏まえた上で特に重要だと考えられる項目であるアロマンティック・スペクトラムのアイデンティティ、アセクシュアル・スペクトラムのアイデンティティの分布を性別、年齢階級別に示す。その後、ロマンティック・アセクシュアルに分析対象を限定した上で日本独自の区分であるノンセクシュアル自認の分布を性別、年齢階級別に示す。最後に、自慰行為の頻度、性欲の有無、他者と性行為をしようと思うことがあるか否かの分布をアセクシュアル・スペクトラムのアイデンティティ別に示す。

## IV. 結果

### 1. 回答者の分布

本節では、調査回答者の分布を示す。ここでは特に、性別、年齢階級、居住地に注目し、回答者の人口学的特徴を把握する。なお、サンプルの代表性についてはAro/Ace調査実行委員会（2020）で詳細に検討されている。本調査における回答者の人口学的特徴が国勢調査などの分布と異なっていることを調査手法など技術的な要因によるバイアスとして捉えるべきなのか、日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの傾向を正確に表わしていると考えられるべきなのかについては、今後さらなる研究が求められる。本論文では両方の可能性を踏まえた上で、考察を行っていく。

表1は、回答者の分布を性別にみたものである。回答者のうち、シスジェンダー女性は62.7%、シスジェンダー男性は4.7%、非シスジェンダーは32.5%であり、シスジェンダー女性の割合が最も高かった。本調査では、「出生時の性別と、現在自分が捉えている性別が「一致」していると思いますか」という質問に「思う」と回答した人へののみ出生時性別を聞いている（性自認は全回答者にたずねている）。そのため、上記質問に「思わない」または「分からない」と回答した人の出生時性別は不明である。なお本論文では、この質問に対して「思う」と回答した人をシスジェンダー、それ以外の回答をした人を非シスジェンダーと分類する。出生時性別が人口学的に重要な情報であることは疑いようがないものの、出生時性別を質問することはとりわけ非シスジェンダーに該当する人にとって配慮す

べき事項であるため、以上のような設計になっている。以下、本分析では、シスジェンダー女性、シスジェンダー男性、非シスジェンダーの3カテゴリーからなる性別の分類を用いる。

表1 性別にみた回答者の分布 (Aro/Ace 調査2020)

	度数	パーセント
シスジェンダー女性	1,056	62.7
シスジェンダー男性	80	4.7
非シスジェンダー	547	32.5
無回答	2	0.1
合計	1,685	100.0

表2は回答者の分布を年齢階級別にみたものである。実際の設問では、調査回答日時点の実年齢をたずねている。回答者のうち、10代は11.2%、20代は62.0%、30代は21.1%、40代以上は5.8%であり、20代の割合が最も高かった。なお、年齢の中央値は25.0、平均値は26.5、標準偏差は6.9で、13-63歳からの回答があった。

表2 年齢階級別にみた回答者の分布 (Aro/Ace 調査2020)

	度数	パーセント
10代	188	11.2
20代	1,045	62.0
30代	355	21.1
40代以上	97	5.8
合計	1,685	100.0

表3は回答者の分布を居住地別にみたものである。実際の設問では、都道府県および「日本以外」が選択肢として配置されている。回答者のうち、東京都在住は25.3%、千葉県・埼玉県・神奈川県在住は22.2%、京都府・大阪府・兵庫県在住は12.8%、静岡県以東の東日本在住は17.2%、石川県・愛知県以西の西日本在住は18.2%であり、東京都在住の割合が最も高かった。

表3 居住地別にみた回答者の分布 (Aro/Ace 調査2020)

	度数	パーセント
東京都	426	25.3
千葉県・埼玉県・神奈川県	374	22.2
京都府・大阪府・兵庫県	215	12.8
東日本（～静岡県）	289	17.2
西日本（石川県・愛知県～）	307	18.2
日本以外	9	0.5
無回答	65	3.9
合計	1,685	100.0

## 2. 主要項目の結果

本節では、アロマンティック・スペクトラムのアイデンティティ、アセクシュアル・ス

ペクトラムのアイデンティティ、ノンセクシュアル自認、自慰行為の頻度、性欲の有無、他者と性行為をしようと思うことがあるか否かの分布を示す。

表4aおよび4bは、性別および年齢階級別にアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティの分布をみたものである。実際の設問では、自認しているカテゴリーの選択肢として「ロマンティック【恋愛的に惹(ひ)かれる】、アロマンティック、グレイアロマンティック/グレイロマンティック、デミロマンティック、リスロマンティック、クエスチョニング、Aro/Aceを自認していない、その他」が配置されている。分析にあたって、クエスチョニング、Aro/Aceを自認していない、その他を「その他」として再コーディングした。回答者のうち、48.0%がアロマンティックであり、最も割合が高かった。性別にみると、シスジェンダー男性はシスジェンダー女性や非シスジェンダーに比べてロマンティックを自認する割合が高い結果となり、性別による差がみられた。その一方、年齢階級とアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティの間に10%水準で統計的に有意な連関はみられなかった<sup>21)</sup>。

表4a 性別にみたアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティの分布 (Aro/Ace 調査2020)

(%)	シス女性	シス男性	非シスジェンダー	全体
アロマンティック	49.0	51.2	45.5	48.0
グレイ (ア) ロマンティック	7.0	10.0	8.8	7.7
デミロマンティック	11.1	6.3	9.1	10.2
リスロマンティック	6.1	1.3	6.4	5.9
ロマンティック	13.3	27.5	10.6	13.1
その他	12.5	2.5	18.8	14.1
無回答	1.1	1.3	0.7	1.0
n	1,056	80	547	1,685

$\chi^2$ : 45.323 ( $p < .001$ ), Cramer's V: 0.095 ( $p < .001$ )

注: 性別が無回答である回答者 (n=2) の結果は示していないが、「全体」は性別無回答を含む。

表4b 年齢階級別にみたアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティの分布 (Aro/Ace 調査2020)

(%)	10代	20代	30代	40代以上	全体
アロマンティック	45.7	47.7	51.3	44.3	48.0
グレイ (ア) ロマンティック	8.5	7.6	8.2	6.2	7.7
デミロマンティック	8.5	10.9	9.6	8.2	10.2
リスロマンティック	5.3	6.5	4.2	7.2	5.9
ロマンティック	11.7	12.9	13.2	16.5	13.1
その他	19.1	13.7	12.7	13.4	14.1
無回答	1.1	0.8	0.8	4.1	1.0
n	188	1,045	355	97	1,685

$\chi^2$ : 21.401 ( $p = .260$ ), Cramer's V: 0.065 ( $p = .260$ )

21) なお、シスジェンダー女性、シスジェンダー男性、非シスジェンダーそれぞれについて年齢階級別にみたアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティの分布も検討したが、シスジェンダー女性については10%水準で統計的に有意な連関はみられなかった ( $p = .909$ )。シスジェンダー男性については、期待度数5未満のセルが85.7%であったためモンテカルロ・シミュレーションを行った上でカイ二乗検定を行った ( $p = .036$ ; 99%信頼区間 = .031-.040)。回答者のうち10代および20代は30代および40代以上と比べてロマンティックを自認する割合が高かったが、ケース数が80と少ないこともあり、結果の解釈には注意が必要である。非シスジェンダーについては、若年層は中高年層と比べて「その他」と回答する割合が高いことがわかった ( $p = .001$ )。

表5aおよび5bは、性別および年齢階級別にアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティの分布をみたものである。実際の設問では、自認しているカテゴリーの選択肢として「セクシュアル【性的に惹(ひ)かれる】、アセクシュアル、グレイアセクシュアル/グレイセクシュアル、デミセクシュアル、リスセクシュアル、Aro/Aceを自認していない、その他」が配置されている。なお、調査設計上のエラーにより、「クエスチョニング」は選択肢に含まれていない。分析にあたって、Aro/Aceを自認していない、その他を「その他」として再コーディングした。回答者のうち、65.6%がアセクシュアルであり、最も割合が高かった。性別にみると、シスジェンダー女性や非シスジェンダーはシスジェンダー男性に比べてアセクシュアルを自認する割合が高い一方でセクシュアルを自認する割合が低いなど、性別による差がわずかながらみられた。その一方、年齢階級とアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティの間に10%水準で統計的に有意な連関はみられなかった<sup>22)</sup>。

表5a 性別にみたアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティの分布 (Aro/Ace 調査2020)

(%)	シス女性	シス男性	非シスジェンダー	全体
アセクシュアル	65.9	60.0	66.2	65.6
グレイ (ア) セクシュアル	8.4	12.5	7.7	8.4
デミセクシュアル	9.1	5.0	5.9	7.8
リスセクシュアル	2.6	1.3	3.5	2.8
セクシュアル	8.0	13.8	9.1	8.7
その他	5.4	6.3	6.9	6.0
無回答	0.7	1.3	0.7	0.7
n	1,056	80	547	1,685

$\chi^2$ : 26.957 ( $p = .080$ ), Cramer's V: 0.073 ( $p = .080$ )

注: 性別が無回答である回答者 (n=2) の結果は示していないが、「全体」は性別無回答を含む。

表5b 年齢階級別にみたアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティの分布 (Aro/Ace 調査2020)

(%)	10代	20代	30代	40代以上	全体
アセクシュアル	65.4	65.5	67.3	61.9	65.6
グレイ (ア) セクシュアル	8.0	7.8	9.6	11.3	8.4
デミセクシュアル	4.3	8.6	7.6	7.2	7.8
リスセクシュアル	4.3	2.7	2.0	4.1	2.8
セクシュアル	10.6	8.5	8.7	6.2	8.7
その他	5.9	6.2	4.5	9.3	6.0
無回答	1.6	0.8	0.3	0.0	0.7
n	188	1,045	355	97	1,685

$\chi^2$ : 17.871 ( $p = .464$ ), Cramer's V: 0.059 ( $p = .464$ )

22) なお、シスジェンダー女性、シスジェンダー男性、非シスジェンダーそれぞれについて年齢階級別にみたアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティの分布も検討したが、シスジェンダー女性については10%水準で統計的に有意な連関はみられなかった ( $p = .636$ )。シスジェンダー男性については、期待度数5未満のセルが82.1%であったためモンテカルロ・シミュレーションを行った上でカイ二乗検定を行った ( $p = .065$ ; 99%信頼区間 = .058-.071)。しかしながら、ケース数が80と少ないこともあり、特定の回答傾向はみられなかった。非シスジェンダーについては10%水準で統計的に有意な連関はみられなかった ( $p = .522$ )。

表 6 a および 6 b は、性別および年齢階級別にノンセクシュアル自認の分布をみたものである。分析にあたっては、日本においてノンセクシュアルという用語がロマンティックのアセクシュアルに近い意味で用いられていることを踏まえ、ロマンティック・アセクシュアルのみに分析対象を絞っている。また、実際の設問では、選択肢として「はい、いいえ、言葉を聞いたことがない、言葉を聞いたことはあるが意味を知らない、分からない、その他」が配置されているが、言葉を聞いたことがない、言葉を聞いたことはあるが意味を知らない、分からない、その他を「その他」として再コーディングした。ロマンティック・アセクシュアル回答者のうち、80.7%がノンセクシュアルを自認していた。性別とノンセクシュアル自認の間に10%水準で統計的に有意な連関はみられなかった。年齢階級別にみると、回答者のうち10代は20代および30代に比べてノンセクシュアルを自認する割合が低かった。しかし、40代も10代ほどではないもののノンセクシュアル自認割合が低く、さらに10代と40代については該当者数が少ないため、結果の解釈には注意が必要である。

表 6 a 性別にみたノンセクシュアル自認の分布 (Aro/Ace 調査2020)

(%)	シス女性	シス男性	非シスジェンダー	全体
はい	81.5	93.3	73.8	80.7
いいえ	6.7	6.7	11.9	8.0
その他	11.8	0.0	14.3	11.4
n	119	15	42	176

$\chi^2$ : 3.673 ( $p = .452$ ), Cramer's V: 0.102 ( $p = .452$ )

表 6 b 年齢階級別にみたノンセクシュアル自認の分布 (Aro/Ace 調査2020)

(%)	10代	20代	30代	40代以上	全体
はい	66.7	83.2	82.5	72.7	80.7
いいえ	27.8	4.7	10.0	0.0	8.0
その他	5.6	12.1	7.5	27.3	11.4
n	18	107	40	11	176

$\chi^2$ : 15.618 ( $p = .016$ ), Cramer's V: 0.211 ( $p = .016$ )

表 7, 表 8, 表 9 は、それぞれアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別に自慰行為の頻度、性欲の有無、他者と性行為をしようと思うことがあるか否かの分布をみたものである。自慰行為の頻度については10段階のものを5段階に変換し、言葉の意味がわからない、無回答、その他を「その他」として再コーディングした。性欲の有無、他者との性行為に対する態度については5段階のリッカート尺度を3段階のものに変換した。また分析にあたって、アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティのうち、グレイアセクシュアル/グレイセクシュアル、デミセクシュアル、リスセクシュアルを「アセクシュアル周辺カテゴリー」として再コーディングした。

表 7 によると、アセクシュアル回答者のうち32.9%が月1回～週1回の頻度で自慰行為を行っており、アセクシュアルの回答者の中で最も割合が高かった。また、週2回以上の回答者も16.5%いた。アセクシュアル周辺カテゴリーやセクシュアル回答者はアセクシュ

アル回答者に比べて自慰行為の頻度が高く、アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別による差がみられた。

表7 アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別にみた自慰行為の頻度の分布  
(Aro/Ace 調査 2020)

(%)	アセクシュアル	周辺カテ	セクシュアル	その他	全体
一度も自慰行為をしたことがない	17.7	7.8	4.8	9.9	14.2
以前は自慰行為をしていたが、現在はしていない	7.4	2.2	0.7	7.9	5.9
月1回未満	10.6	9.4	6.8	5.9	9.8
月1回～週1回	32.9	41.3	28.8	41.6	34.6
週2回以上	16.5	24.7	50.0	22.8	21.4
その他	14.8	14.7	8.9	11.9	14.1
n	1,106	320	146	101	1,685

$\chi^2$ : 134.574 ( $p < .001$ ), Cramer's V: 0.141 ( $p < .001$ )

注: アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティが無回答である回答者 (n=12) の結果は示していないが、「全体」はアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ無回答を含む。「周辺カテ」=アセクシュアル周辺カテゴリー。

表8によると、アセクシュアル回答者のうち66.4%が性欲があると思うと答えており、アセクシュアルの回答者の中で最も割合が高かった。アセクシュアル周辺カテゴリーやセクシュアル回答者はアセクシュアル回答者に比べて性欲があると思う割合が高く、アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別による差がみられた。

表8 アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別にみた性欲の有無の分布  
(Aro/Ace 調査2020)

(%)	アセクシュアル	周辺カテ	セクシュアル	その他	全体
思う	66.4	89.1	96.6	76.2	73.9
どちらでもない	6.1	2.2	0.7	7.9	5.0
思わない	27.1	8.8	2.7	14.9	20.7
無回答	0.4	0.0	0.0	1.0	0.3
n	1,106	320	146	101	1,685

$\chi^2$ : 115.748 ( $p < .001$ ), Cramer's V: 0.151 ( $p < .001$ )

注: アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティが無回答である回答者 (n=12) の結果は示していないが、「全体」はアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ無回答を含む。「周辺カテ」=アセクシュアル周辺カテゴリー。

表9によると、アセクシュアル回答者のうち91.6%が他者と性行為をしようと思うことがないと答えており、アセクシュアルの回答者の中で最も割合が高かった。アセクシュアル周辺カテゴリーやセクシュアル回答者はアセクシュアル回答者に比べて性行為をしようと思うことがないと答える割合が低く、アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別による差がみられた。

表9 アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別にみた他者と性行為をしようと思うことがあるか否かの分布 (Aro/Ace 調査2020)

(%)	アセクシュアル	周辺カテ	セクシュアル	その他	全体
ある	6.1	26.9	67.8	26.7	16.7
どちらでもない	2.1	4.7	3.4	5.0	2.8
ない	91.6	68.4	27.4	67.3	80.1
無回答	0.3	0.0	1.4	1.0	0.4
n	1,106	320	146	101	1,685

$\chi^2$ : 421.035 ( $p < .001$ ), Cramer's V: 0.289 ( $p < .001$ )

注: アセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティが無回答である回答者 (n=12) の結果は示していないが、「全体」はアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ無回答を含む。「周辺カテ」=アセクシュアル周辺カテゴリー。

表7, 表8, 表9から, 自慰行為の頻度と性欲の有無については, アセクシュアル回答者の多くがその存在を示すような回答をしていたのに対し, 他者との性行為をしようと思うことがあるか否かについては, アセクシュアル回答者のほとんどがないという回答をしていることがわかった。

## V. 考察

### 1. 結果の解釈

本研究では, 日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの人口学的多様性を記述すべく, Aro/Ace 調査実行委員会によって実施された「Aro/Ace 調査2020」を分析した。以下, 分析で得られた結果の解釈を述べる。

はじめに, 回答者の性別は女性が多く, 男性は少ないという先行研究 (Bogaert 2004, Hiramori and Kamano 2020b) と同様の傾向が本研究でも確認された。さらに, 非シスジェンダーの割合がシスジェンダー男性よりも高いという当事者団体による調査結果 (Weis et al. 2020) とも類似した結果となった。アセクシュアルに女性が多数を占める背景として性役割, 性機能, 性行動などが関係している可能性も指摘されているが (Bogaert 2004), アセクシュアルをはじめとするアイデンティティになぜシスジェンダー女性が多く集めるのかなど, 性別による分布の違いについては明らかになっていないことも多い (Carroll 2020)。一方, Aro/Ace コミュニティにおいて非シスジェンダーが相対的に多いことについては, 性的なパートナーを魅了する必要がないことと関連性があるという指摘がある (Chasin 2011)。また, 別の視点として, Aro/Ace をとりまく環境が自認から遠ざけている可能性も考えられる。例えば, アセクシュアルは知名度が低いこともあり, 違和感を持ったとしても調べるなどして言葉に出会わなければ自認しない可能性がある (吉岡 2019)。したがって Aro/Ace に近い特徴 (例えば, 恋愛的／性的惹かれを感じない) があっても自認しない／できないことがある。自認するためには他の要素, ここでは性自認のあり方がシスジェンダーでないことなどがアセクシュアルに繋がる機会を提供している可能性が指摘できる。

年齢階級については、本調査の回答者は年齢層が低いことがわかり、自認を基準とした場合にアセクシュアルは相対的に年齢が低かったという結果 (Hiramori and Kamano 2020b) を支持する形となった。当事者団体による調査でも同様の傾向が確認されているが (Weis et al. 2020)、性的惹かれを基準とした場合ではアセクシュアルと非アセクシュアルで年齢差はほとんどなかったと報告されており (Bogaert 2004)、自認を基準とした方が年齢は低い傾向になることが示唆される。本調査における回答者の年齢が低い要因として、オープン型ウェブ調査という調査法の特長も理由として挙げることができるが、自認を基準とした場合に年齢が低くなる重要な背景として Aro/Ace に関する情報媒体の偏りが考えられる。近年では雑誌などインターネット以外で Aro/Ace に関する情報を手に入れることも可能になりつつあるが (例えば、大川 2018)、日本語で書かれたアセクシュアルに関する書籍は非常に少ないため (例えば、デッカー 2019)、インターネットを介した情報が多いと推測される。インターネットはこれまでもアセクシュアル (または Aro/Ace) にとってアイデンティティ形成やコミュニティの形成、情報発信をする重要な場であると指摘されてきた (三宅 2017, Pachon 2013)。以上を、言葉を知ることが自認の契機となる点 (吉岡 2019) と合わせて推論すれば、個人がどの媒体から情報にアクセスできるかということが自認にも影響することになる。つまり、Aro/Ace に関する情報を手に入れやすいインターネットとの関わり方の違いが自認のしやすさに影響し、結果として当事者コミュニティの構成員の年齢分布が若年層に偏っている可能性がある。

次に、アロマンティック・スペクトラム・アイデンティティに関する結果から、性別による違いが確認された。しかし、海外の研究ではアセクシュアルの中でアロマンティックとロマンティックの分布に性別による差はなかったと報告されており (Antonsen et al. 2020)、先行研究とは異なる結果となった。本研究でシスジェンダー男性にロマンティック自認が多い要因として、先行研究の測定方法との違いがあると考えられる。先行研究では、アロマンティックとロマンティックの区別を恋愛的に惹かれる頻度や性別で測定している (Antonsen et al. 2020)。本研究とは恋愛惹かれと自認という点で測定方法の違いがあることに加え、アロマンティック・スペクトラムのアイデンティティには惹かれる性別や頻度だけではなく、惹かれの仕方に関するものがある。本研究でいえば、情緒的な繋がりができてからのみ恋愛惹かれを感じるデミロマンティック、恋愛感情が返されることを必要としない形で恋愛的に惹かれるリスロマンティックがそれにあたる。本研究ではデミロマンティックやリスロマンティックがシスジェンダー男性と比べてシスジェンダー女性と非シスジェンダーに多い傾向が示されたが、先行研究は惹かれの仕方に関して結果に反映できていない可能性がある。そのため、先行研究ではロマンティック女性を多く見積もり、性別による差がないという結果になったと考えられる。性別によってアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティの分布に差があるという本研究の結果が、日本特有の状況または有意抽出調査であることに由来する可能性も十分に考えられるが、測定法の違いによる可能性も考慮すべきだと思われる。そして、これは Aro/Ace に関する調査において、惹かれの性別や有無 (頻度) だけでなく惹かれの仕方も重要な側面であることを

示唆している。

自慰行為の頻度に関してアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティ別にみると、アセクシュアルが最も頻度が少ない結果になり、当事者団体による調査で確認されている傾向（Weis et al. 2020）が本調査でも認められた。この点について、アセクシュアルの自認と自慰行為の頻度の関連性も想定されるが、アセクシュアルの中で「自慰行為をしたことがない」と「以前は自慰行為をしていたが、現在はしていない」を合わせた割合よりも、「月1回～週1回」の回答の方が多かったことは注目に値する。アセクシュアルの自認と自慰行為の頻度は関連している可能性が高いものの、自慰行為の有無のみがアセクシュアルのアイデンティティ形成に決定的な影響力をもたらしているとは言えないことが示唆される。

続いて性欲の有無に関しても、自慰行為の頻度と同様にアセクシュアルが最も性欲が弱い傾向が確認され、先行研究と同様の結果だった（Weis et al. 2020）。しかしながらアセクシュアルを自認する人の中で6割以上が性欲があると回答しており、自慰行為の頻度に関する結果と合わせると、日本においても自慰行為は他者に向かない性欲でありアセクシュアルであることと矛盾しない（Hinderliter 2013）と理解されていると考えられる。

一方で、他者と性行為をしようと思うことがあるか否かに関しては、自慰行為の頻度および性欲の有無と異なる傾向が確認された。セクシュアル自認以外のアイデンティティでは他者と性行為をしようと思うことが少なく、特にアセクシュアルではその傾向が顕著であった。これはアセクシュアルの自慰行為に対する欲望（desire）は他のセクシュアリティと変わらないものの、他者と性行為をする欲望が低いという研究結果（Prause and Graham 2007）を支持するものである。この結果は、他者との性行為をしようと思うか否かが自認において準拠点となる可能性を示唆している。つまり、自慰行為や性欲は自認と矛盾しない一方で、他者との性行為が自認もしくはAro/Aceコミュニティに参加する基準となっている可能性がある。これは他者と性行為をする欲望や性行動がないことによってアセクシュアルを自認することもあるという研究結果（Scherrer 2008）を部分的に肯定するものである。しかし、近年の海外におけるアセクシュアル研究では、性的欲望や性行動の欠如ではなく性的惹かれの欠如として捉えるのが一般的になってきており（Chasin 2011）、他者との性行為をしようと思わないことと自認の関連性は慎重な議論を要する。性的惹かれを定義とすることの有用性として、性行為をするアセクシュアルを排除すべきとする立場と距離を取ることが可能になる点が指摘されているように（Hinderliter 2013）、Aro/Aceコミュニティにおいて性行為をしようと思うか否かが重要な意味を持っていたとしても、それを自認の要件として扱ってはならないと考えられる。

この他、本研究の結果として、海外の当事者団体による調査結果（Weis et al. 2020）と同様にアセクシュアルを自認する人が6割以上だった一方で、当事者コミュニティが必ずしもアセクシュアル自認の人のみで構成されているわけではないことが明らかになった。さらに、ノンセクシュアルに関して、ロマンティックとアセクシュアルを自認する人の8割以上がノンセクシュアルと自認していることがわかった。日本のAro/Aceコミュニティ

において、ノンセクシュアルがロマンティック・アセクシュアルと類似する概念として使用されている可能性が高いことが示された。

## 2. 今後の展望

本研究は日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの人口学的多様性を記述したが、限界点がまったくないわけではない。本研究には、以下3つの限界点がある。第1に、本研究で使用したデータは当事者コミュニティを対象とした調査を基にしており、本研究の結果を日本国内の人口一般に適用することには留意が必要な点である。「Aro/Ace 調査2020」はマイノリティ集団を調査対象としており、関心層にアプローチしやすいオープン型ウェブ調査のメリットはあるものの、性別や年齢階級、居住地の分布を明らかにするためには日本全国を対象とした無作為抽出調査が必要である。第2に、本研究がアプローチした当事者コミュニティの層には偏りがあると考えられる点である。アセクシュアルを自認する人の中で恋愛的に惹かれにくい人よりも惹かれる人の方が多い可能性が報告されているが (Hiramori and Kamano 2020a)、本研究ではロマンティック自認が13%という結果になっており、ロマンティックのAceスペクトラム当事者による回答を十分に得られなかった可能性がある。アロマンティックとロマンティックでは異なる背景、状況、認識があると考えられるため、ロマンティックまたはアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティの多様性を把握可能な調査設計をする必要がある。第3に、本研究では量的調査の特性上、各結果の意味や背景を解釈するには限界がある点である。例えば、本論文では自慰行為の頻度について分析したが、そもそも自慰行為とはAro/Aceにとってどのような意味を持つものなのかを本研究では検討することができない。他にも、Aro/Aceのアイデンティティと性別の関係性について海外では性役割の観点から指摘する研究が増えつつあるが (例えば、Gupta 2019, Przybylo 2014, Vares 2018)、Aro/Aceにとって日本社会の性役割はどのような意味を持ち、それが自認に影響するのかについては質的研究を含めた多様なアプローチから研究することが望まれる。

本研究では、既存の人口学研究 (Bogaert 2004, Hiramori and Kamano 2020b, Poston and Baumle 2010) では記述されてこなかった、Aro/Aceに関わるアイデンティティの多様性や自慰行為・性欲・性行為をしようと思うか否かの関係性について提示した。今後は、本論文で分析した調査項目以外の分析を行いたいと考えている。例えば、「Aro/Ace 調査2020」には自認の他に恋愛的／性的惹かれの対象や有無に関する項目があり、自認と惹かれの関連性について検討することができる。また、恋愛的／性的惹かれの対象や有無の項目は自認前と自認後で分けて質問しており、自認前後によって惹かれの経験に差ができるのかも検討可能である。加えて、性行為人数や性的な魅力を感じるか否か、付き合いたいと思うか、独占欲があると思うかなど、各項目が自認とどのような関係性にあるのかについても今後の研究課題としたい。アセクシュアルが社会における強制的性愛の可視化に有用である (Chasin 2014) ならば、本研究もその営為に貢献しうだろう。本研究の結果ならびに限界点を踏まえた今後のアロマンティック／アセクシュアル・スペクト

ラム研究の蓄積が期待される。

(2021年4月7日査読終了)

## 参考文献

- Aro/Ace 調査実行委員会 (2020) 『アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020概要報告』  
<https://ace-community-survey.jimdosite.com/> (2021年2月25日最終アクセス)。
- エヴァンス, D. 著, 金城克哉訳 (2006) 「Celibacy, 禁欲」 イーディー, J. 編『セクシュアリティ基本用語辞典』明石書店, pp.57-58.
- 大川恵美 (2018) 「アセクシュアル」を知ってほしい『AERA (アエラ)』朝日新聞出版, 第31巻, 58号, p.56.
- 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 (2019) 『大阪市の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート報告書 (単純集計結果)』JSPS 科研費16H03709 「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築」(研究代表者 釜野さおり)  
[http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/\\*20191108大阪市民調査報告書 \(修正2\).pdf](http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/*20191108大阪市民調査報告書(修正2).pdf) (2021年2月25日最終アクセス)。
- 埼玉県 (2021) 『埼玉県 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査—報告書—』  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/183194/lgbtqchousahoukokusho.pdf> (2021年2月25日最終アクセス)。
- デッカー, J. S. 著, 上田勢子訳 (2019) 『見えない性的指向アセクシュアルのすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて』明石書店。
- 認定 NPO 法人虹色ダイバーシティ・国際基督教大学ジェンダー研究センター (2020) 『niji VOICE 2020報告書』<https://nijibridge.jp/wp-content/uploads/2020/12/nijiVOICE2020.pdf> (2021年2月25日最終アクセス)。
- ブレイン, J. 著, 金城克哉訳 (2006) 「Asexuality、アセクシュアリティ、非性愛」 イーディー, J. 編『セクシュアリティ基本用語辞典』明石書店, p.35.
- 松浦優 (2020) 「メランコリーのジェンダーと強制的性愛——アセクシュアルの「抹消」に関する理論的考察」『Gender & Sexuality』第15号, pp.115-137.
- 三宅大二郎 (2017) 「asexual のドラマトゥルギー——AVENにおける定義の変遷に着目して」藤川信夫編『人生の調律師たち——動的ドラマトゥルギーの展開』春風社, pp.370-408.
- 山本奈朱香 (2018) 「恋愛感情がわからない…性的関係のぞまない「アセクシュアル」」  
<https://withnews.jp/article/f0181101006qq0000000000000000W09t10101qq000018242A> (2021年2月25日最終アクセス)。
- 吉岡真梨子 (2019) 「Asexual であるという自覚はいかにしてなされ自己受容されるのか?——ライフストーリー・インタビューによる事例から」『学習開発学研究』第12号, pp.61-70.
- American Psychiatric Association (2000) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*, 4th ed., Washington DC, American Psychiatric Publishing.
- American Psychiatric Association (2013) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*, 5th ed., Washington DC, American Psychiatric Publishing.
- Antonsen, A. N., Zdaniuk, B., Yule, M. and Brotto, L. A. (2020) "Ace and Aro: Understanding Differences in Romantic Attractions Among Persons Identifying as Asexual," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 49, Issue 5, pp.1615-1630.
- Baumle, A. K. ed. (2013) *International Handbook on the Demography of Sexuality*, Dordrecht, Springer.
- Bogaert, A. F. (2004) "Asexuality: Prevalence and Associated Factors in a National Probability Sample," *The Journal of Sex Research*, Vol. 41, Number 3, pp.279-287.
- Bogaert, A. F. (2006) "Toward a Conceptual Understanding of Asexuality," *Review of General Psychology*, Vol. 10, Issue 3, pp.241-250.

- Bogaert, A. F. (2012) "Asexuality and Autochorissexualism (Identity-Less Sexuality)," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 41, Issue 6, pp.1513-1514.
- Bogaert, A. F. (2013) "The Demography of Asexuality," in Baumle, A. K. ed. *International Handbook on the Demography of Sexuality*, Dordrecht, Springer, pp.275-288.
- Bogaert, A. F. (2015) "Asexuality: What It Is and Why It Matters," *The Journal of Sex Research*, Vol. 52, Number 4, pp.362-379.
- Brotto, L. A., Knudson, G., Inskip, J., Rhodes, K. and Erskine, Y. (2010) "Asexuality: A Mixed-Methods Approach," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 39, Issue 3, pp.599-618.
- Brotto, L. A. and Yule, M. A. (2011) "Physiological and Subjective Sexual Arousal in Self-Identified Asexual Women," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 40, Issue 4, pp.699-712.
- Carroll, M. (2020) "What Can Asexuality Offer Sociology? Insights from the 2017 Asexual Community Census," *SocArXiv*. <https://doi.org/10.31235/osf.io/bh7t3> (2021年2月25日最終アクセス).
- Chasin, C. D. (2011) "Theoretical Issues in the Study of Asexuality," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 40, Issue 4, pp.713-723.
- Chasin, C. D. (2014) "Making Sense in and of the Asexual Community: Navigating Relationships and Identities in a Context of Resistance," *Journal of Community & Applied Social Psychology*, Vol. 25, Issue 2, pp.167-180.
- Chu, E. (2014) "Radical Identity Politics: Asexuality and Contemporary Articulations of Identity," in Cerankowski, K. J. and Milks, M. eds. *Asexualities: Feminist and Queer Perspectives*, New York, Routledge, pp.79-99.
- Gazzola, S. B. and Morrison, M. A. (2011) "Asexuality: An Emergent Sexual Orientation," in Morrison, T. G., Morrison, M. A., Carrigan, M. A. and McDermott, D. T. eds. *Sexual Minority Research in the New Millennium*, New York, Nova Science Publisher, pp.21-44.
- Greaves, L., Barlow, F. K., Huang, Y., Stronge, S., Fraser G. and Sibley, C. G. (2017) "Asexual Identity in a New Zealand National Sample: Demographics, Well-Being, and Health," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 46, Issue 8, pp.2417-2427.
- Gupta, K. (2019) "Gendering Asexuality and Asexualizing Gender: A Qualitative Study Exploring the Intersections between Gender and Asexuality," *Sexualities*, Vol. 22, Issue 7-8, pp.1197-1216.
- Hinderliter, A. (2009) "Methodological Issues for Studying Asexuality," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 38, Issue 5, pp.619-621.
- Hinderliter, A. (2013) "How is Asexuality Different from Hypoactive Sexual Desire Disorder?," *Psychology & Sexuality*, Vol. 4, Issue 2, pp.167-178.
- Hinderliter, A. (2015) "Sexual Dysfunctions and Asexuality in DSM-5," in Demazeux, S. and Singy, P. eds. *The DSM-5 in Perspective Philosophical Reflections on the Psychiatric Babel*, New York, Springer, pp.125-139.
- Hiramori, D. and Kamano, S. (2020a) "Understanding Sexual Orientation Identity, Sexual/Romantic Attraction, and Sexual Behavior beyond Western Societies: The Case of Japan," *SocArXiv*. <https://doi.org/10.31235/osf.io/ds8at> (2021年2月25日最終アクセス).
- Hiramori, D. and Kamano, S. (2020b) "Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan: Findings from the Osaka City Residents' Survey and Related Preparatory Studies," *Journal of Population Problems*, Vol. 76, No. 4, pp.443-466.
- Kobayashi, J. (2017) "Have Japanese People Become Asexual? Love in Japan," *International Journal of Japanese Sociology*, Vol. 26, Issue 1, pp.13-22.
- Krueger, E. A., Fish, J. N., Hammack, P. L., Lightfoot, M., Bishop, M. D. and Russell, S. T. (2020) "Comparing National Probability and Community-Based Samples of Sexual Minority Adults: Implications and Recommendations for Sampling and Measurement," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 49, Issue 5, pp.1463-1475.
- Mardell, A. (2016) *The ABC's of LGBT+*, Florida, Mango Media.
- Pacho, A. (2013) "Establishing Asexual Identity: The Essential, the Imaginary, and the Collective,"

- Graduate Journal of Social Science*, Vol. 10, Issue 1, pp.13-35.
- Poston, D. L., Jr. and Baumle, A. K. (2010) "Patterns of Asexuality in the United States," *Demographic Research*, Vol. 23, Article 18, pp.509-530.
- Prause, N. and Graham, C. A. (2007) "Asexuality: Classification and Characterization," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 36, Issue 3, pp.341-356.
- Przybylo, E. (2014) "Masculine Doubt and Sexual Wonder: Asexually-Identified Men Talk about Their (A)sexualities," in Cerankowski, K. J. and Milks, M. eds. *Asexualities: Feminist and Queer Perspectives*, New York, Routledge, pp.225-247.
- Przybylo, E. (2016) "Introducing Asexuality, Unthinking Sex," in Fischer, N. and Seidman, S. eds. *Introducing the New Sexuality Studies*, 3rd Edition, New York, Routledge, pp.181-191.
- Scherrer, K. S. (2008) "Coming to an Asexual Identity: Negotiating Identity, Negotiating Desire," *Sexualities*, Vol. 11, Issue 5, pp.621-641.
- Sexual Minority Assessment Research Team (SMART) (2009) *Best Practices for Asking Questions about Sexual Orientation on Surveys*, Los Angeles, The Williams Institute.
- Tori, B. (2018) "Gender Discrepancy in Asexual Identity: The Effect of Hegemonic Gender Norms on Asexual Identification," *WWU Honors Program Senior Projects*, 81, [https://cedar.wvu.edu/wwu\\_honors/81](https://cedar.wvu.edu/wwu_honors/81) (2021年3月31日最終アクセス).
- Vares, T. (2018) "'My [Asexuality] Is Playing Hell with My Dating Life': Romantic Identified Asexuals Negotiate the Dating Game," *Sexualities*, Vol. 21, Issue 4, pp.520-536.
- Weis, R., Tomaskovic-Moore, S., Bauer, C., Miller, T. L., Adroit, M., Baba, A., van der Biezen, T., Burns, R., Cotter, N., Dodson, K., G, L., Ginoza, M., Guo, Y., Hermann, L., Lee, W., McCann, S., Mellema, R., Meinhold, M., Nicholson, S., Penten, P., Trieu, T. H., Walfrand, A., Youngblom, K. and Ziebert, J. (2020) *The 2017 and 2018 Asexual Community Survey Summary Report*, <https://asexualcensus.wordpress.com/2020/10/29/2017-2018-ace-community-survey-report> (2021年2月25日最終アクセス).
- Yule, M. A., Brotto, L. A. and Gorzalka, B. B. (2014) "Biological Markers of Asexuality: Handedness, Birth Order, and Finger Length Ratios in Self-Identified Asexual Men and Women," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 43, Issue 2, pp.299-310.
- Zheng, L. and Su, Y. (2018) "Patterns of Asexuality in China: Sexual Activity, Sexual and Romantic Attraction, and Sexual Desire," *Archives of Sexual Behavior*, Vol. 47, Issue 4, pp.1265-1276.

## Demographic Diversity of the Aromantic/Asexual Spectrum in Japan: Findings from the 2020 Aro/Ace Survey

MIYAKE Daijiro and HIRAMORI Daiki

In Western countries, studies using representative surveys and community surveys have begun to reveal the size and the diversity of the asexual population. On the other hand, in Japan, there are only a few studies using representative surveys, and the detailed realities of the asexual population are yet to be explored. This article analyzed a web survey "Aromantic/Asexual Spectrum Survey 2020," conducted by the Aro/Ace Survey Executive Committee. Most of the respondents tended to be cisgender women, young people, and residents of the southern Kanto region. Many identified as aromantic and asexual, but some identified as other aro/ace identities. We also conducted an analysis on "nonsexual," an identity category unique to Japan. While masturbation and sex drives were found in a certain number of asexual respondents, the proportion of those who would like to have sexual contact with others was particularly low among asexual respondents. We conclude that sexual contact with others has important implications for self-identification.

Keywords: asexual, aromantic, LGBT, sexual and gender minorities, sexual orientation and romantic orientation